

冬の庭

小倉 一純

多摩の小高い丘の上にわが家はある。そこから、丹沢山系を左右に従えた、富士の遠景を望むことができる。その山々は頂に雪化粧を施していた。

そんな冬景色を眺めつつ、父は甲斐甲斐しく植物の世話を焼いている。足腰の弱ってきた父を想い、十五年ほど前に僕がリフォームした庭である。

青図あおずを描き、足繁くホームセンターに通いながら、材料を調達した。段差の少なくなった庭は、狭いながらもなかなかよくできている。僕は密かに胸を張っていた。

だが、社会的な責任をすべて肩から下ろした父は、自分の気まぐれで勝手に庭を作り変えてしまう。

地面に空きがあれば、サツキなどの植物を挿し木する。余った植木鉢を見つけては、日当たりのよいところで、いつの間にかもらっておいたサボテンを育てている。

それでは、計画的に造った庭のバランスが

崩れてしまう。庭は、いつの間にか、僕自身の道楽ともなっていた。

「なんでこんなことになっているんだ……」

想定外の変化を遂げている庭を目の当たりにして、僕はリビングでのん気にテレビを見ている父を問いつめる。そんなことがわが家の日常となっていた。

暮れも押し迫り、父が庭で立て続けに三度、転んだ。そのたびに抱き起こし、家の中に運び入れた。骨折もないようなので、心配していなかった。だが、年が明け、正月も終わりの七日を迎えると、「右腕が動かない」と父が言い出した。父は、箸が持てなくなっていた。

とりあえず近くの総合病院の整形外科を受診した。MRIによる画像診断の結果、父の場合、首の骨に問題があることが分かった。

その首の骨だが、経年により脆もろくなっている。その上、中心を通る神経が圧迫されている。大切な神経の通り路が狭くなっていたのだ。

「最悪、呼吸が止まり、死にいたる場合もあります」

若い医師は言う。

「これはもう介護施設で面倒を見る、ということを考えなければならぬ段階です」

「はあ、そんなに……」

医師は言葉を濁していたが、父の命はこのときすでに風前の灯だった。

父の意識はクリアだし、血液検査の結果には基礎疾患などの徴候もなく、年齢にしてはたいしたものである。それに、いつもどおりの大きな声で悪口も言う。

その三か月後に、父がこの世を去るようになるとは、僕らは思ってもいかなかった。

父が最初に転んだのは七十五歳のときである。木枯らしの冷たい風が頬を刺す季節だった。世の中は、西暦二〇〇〇年を迎え、ミレニアムを祝っていた。

近くの理髪店に予約を入れていて、その時

間に間に合わないからといって、父は慌てて家を出た。サンダルを履き、両手はズボンのポケットに突っ込み、半ば駆け足で目的地に向かった。途中、住宅街の道路が工事中になっていて、そこで足を取られ、転倒した。左肩の複雑脱臼骨折という重傷だった。

その二年後に、父は勤めていた会社を辞める。こんな年齢になるまで、父は家族のために働いていた。

それから、父は転倒の常習犯になった。そのたびに近くの総合病院に入院し、整形外科やら脳神経外科の世話になる。僕は、そんな父のために意を決して庭の整備に取りかかったのだ。第一の目的は、できる限り段差をなくすことである。

それまで庭などにはまったく関心のなかった素人の僕の作業である。だから、庭が完成するころには、父は八十歳を迎えていた。

その当時の僕は、毎日家にいて、することもなくぶらぶらしていた。僕は二〇〇〇年、四十

二歳のときに会社を辞めて、自宅で療養生活を送り始めた。療養といっても、僕の場合は、心の病である。父のために体を動かすことは、そんな僕にとってはかえって好都合だった。

怪我と怪我との合間にも、父は体の不調をたびたび訴えた。北関東の田舎育ちで、元來、体の丈夫な父だった。だが、意外にも神経質な性格で、些細な調子の悪さにも妥協できないところがあった。

まつ毛がときどき白目に触れる、足の皮膚が乾燥して痒い、便が細くなった——お尻の穴が小さくなっているんじゃないか、などと言っては母を心配させた。そのたびに、近くの総合病院に父を連れて行く。

わが家では、節税のため、確定申告を毎年行っていたが、控除のための父の医療費の集計には、随分と手間がかかった。なにしろ件数が多いので、僕は毎回、泣かされた。

一方、そんな父に付き添い、病院に赴くのは、

いつも母である。

外出が苦手な僕は、病院まで車で送って行くことはあったが、そこから先は大抵、父と母の二人だった。

多いときには週に三回も病院へ行くので、高齢の母にとっては、大変な重労働だったに違いない。お陰で各科の医師とは随分親しくなり、ていねいに診てもらっていたようだ。

自宅では、父の日常の世話が母を待っていた。食事の介助をし、洗濯をし、風呂に入れ、夜間のトイレの面倒もみた。

年明けに整形外科で父の首の問題を指摘され、わが家では、在宅医療、在宅介護の道を選んだ。それからが大変だった。

父は右腕だけではなく、やがて全身が麻痺に近い状態となった。食事は母が毎回、全介助で食べさせた。もったいも、在宅での最初の十日間が過ぎると、父は普通食をまったく摂ることができなくなった。柔らかいゼリー状の高

カロリー食が、父の食事のすべてとなった。いわゆる「介護食」である。あとは、看護師が準備してくれる点滴で、水分やブドウ糖を補給する。

カロリーの面から言えば、成人男性の一日分には、まったく達していない。だが、父はもう、カロリー云々の状態ではなくなっていた。

居宅介護支援という役所の制度があり、それに携わるケアマネージャーが、さまざまな手配をしてくれた。医師、看護師、理学療法士、入浴介助、介護用品レンタル、医療機器レンタルなど、多岐にわたる。

餅は餅屋である。僕と同年輩の彼女の働きには目を見張った。

サラリーマンを諦め、文筆家を志していた僕は、「こんなときになにが文学だ——」と自嘲せざるを得ない心境になった。

電動で動く介護ベッドをレンタルし、父は二階の洋室から、階下の和室へと、生活の場を移していた。その際、母のベッドも一緒に運び

込んでおいた。

父は、体が動かなくなっただけからは、疼痛を伴うようになり、特に夜になると、毎晩のように大声を上げた。

「痛いよう……痛いよう……」

「お父さん、どうすればいいの」

「足をさすってくれよう……腕をもんでくれよう……」

母は朝になるまで眠れなかった。そんな父には、医師が処方した精神安定剤を飲んでもらうときもあった。眠っている間だけは、一階の和室は静かになる。といってもそれはわずかに数時間のことである。

在宅介護中、母は結局、一瞬たりとも気の休まることがなかった。

母は、社交的なタイプではない。だから、毎日のように医療従事者、関係者が、入れ替わり立ち替わりやってくる状況にも、相当神経をすり減らしていたに違いない。

母にとって、父の在宅介護は、みずからの戦争体験とも重なる部分があったのではないだろうか。

父は紙パンツをつけていたが、それだけでは間に合わず、毎日のように、大量の汚れ物を出した。もう九十歳を超えていた母は、毎晩、父のパジャマやシーツを洗濯し、乾燥機にかけてから、ベッドに入った。

母がそれをやってのけたのは、それが母にとって戦争だったからに違いない。

母は、高齢を迎えてからは、いつも父に話していた。

「お父さんが先に死んでくださいね」

「……」

「そうじゃないと、お父さんを世話する人がだれもいないでしょ」

その日、看護師が帰った後、布団をめくり父の様子を確かめると、体の前で父の両手が組まれていた。そのときは気づかなかったが、考

えてみれば、「もうすぐお迎えが来ますよ」という合図だったのだろう。

それから三日後の朝早く、階下の母が二階の僕を、大きな声で呼んだ。

「お父さんが変なのよ。すぐに来てっ」

近づいて様子を窺うかがうと、父はすでに事切れていた。息が苦しかったらしく、父は口を開けたまま亡くなっていた。

その場で、昼夜対応の在宅医療のクリニックに連絡すると、電話口の向こうで、女性看護師が嗚咽おえつした。

ほどなくいつもの中年医師がその彼女を伴い到着する。父に対してひと通りの所作を終え、ベッドの脇でこう告げた。

「ご主人そしてお父さまは御臨終です」

シャッターを開けた和室の窓越しに、葉桜が見えた。父は一か月後に、満九十六歳の誕生日を迎えるところだった。

わが家の冬の庭に、いつの間にかタンポポが咲いていた。了